

招 聘 研 究 員

氏 名	キリ ヴェメテ (KYRIE Vermette)
所属機関等	ブリティッシュコロンビア大学アジア学科
受入期間	2017年12月5日～2017年12月22日
指導教員	孫 安石 (チューター：李美大一)
研究課題	20世紀前半の日本と韓国における日本人女性たち



均質化、批判、理想化—19世紀の英国女性らの紀行文に見る日本人女性の記述について

キリ ヴェメテ

19世紀後半に西洋人が世界を旅する場合、訪問した国や目にした名所について、決まって紀行文を記した。こうした紀行文は本として出版されることが多く、ビクトリア時代の膨大な旅行文献の一部となっている。その中で特に女性による著作には、訪問国の女性の外見、習慣、状況を描写した章やページが必ず含まれている。だが19世紀後半という時代ゆえに、西洋を文明と現代性の根源と捉えるイデオロギー、つまり他の地域より優れていると認識する枠組みから他国の女性を見つめ理解し、記述している。女性旅行者は優位な立場を保つために、個人的な思い入れや文化的な影響を見せずに執筆する観察者の視点で書くことが多かった。さらに女性作者たちは、上位者目線の均質な表現で本質化することで、常に記述の対象である女性たちを他者として捉えていた。こうした型にはまった表現を「第三世界の女性」と称した学者もいる (ガンジー 1998)。こういう意味では、英国の女性旅行者による日本人女性の扱いも例外ではなかった。

1863年に出版された『A Lady's Visit to Manila and Japan』には「Japanese Women (日本人女性)」と題されたページがあり、その中で作者アンナ・D'Aは「日本人女性は…」(D'A 1863: 202)という出だしですべての女性について、あたかも全員が同じ型にはまり同じ記述で表現できるかのように書いている。エラ・M・ハート・ベネットは1904年に出版された『An English Girl in Japan』において、一章全部を「日本の婦人たち」に割き、「その習慣と作法」を解明しようとしている (ベネット 1904: 66)。さらに両著作で作者たちは複数の日

本人女性を論じるときに冠詞「the」を使用している。「The Japanese women (日本人女性)」(D'A 1863: 202; レイ 1990: 159)、「the fair sex in Japan (日本の婦人)」(ベネット 1904: 66)、「the little Japanese ladies (小さな日本の婦人)」(ベネット 1904: 52)といった表現は、実際は多様であるはずなのに、すべての日本人女性について等しく当てはまる、均質化した一つの分類をなす用語として使われている。そして著者はこの分類を、あくまでも西洋の女性より下位に位置づけていた。中でも一番顕著な例がベネットの言葉の選び方である。均質化する冠詞「the」と人種の表現「Japanese」の間に一貫して「little」という言葉を加えている。ベネットが日本人女性について記述する場合は必ず、「the little ladies」(ベネット 1904: 71)や「the little Japanese ladies」(ベネット 1904: 52)という表現が使われている。「little」という言葉には二つの意味合いがある。文字通りの意味は体の大きさを表しており、この用語により日本人女性は欧州の女性より背が低く、華奢であることをベネットは表そうとしていたと思われる (ベネット 1904: 68)。しかし「little」は年齢が若い人を指す場合にも使われる。ベネットが描く「little ladies」の年齢は必ずしも明確ではないが、昭憲皇太后 (明治天皇の皇后) と仕えの高齢の女流歌人についても「little」という言葉を使っていることから、実際の年齢は考慮していないことがうかがえる (ベネット 1904: 61, 114)。むしろ年齢を示す「little」という用語の使用は日本人女性に対するベネットの見解に起因しており、「全般的な考えや世の中の知識の面で女性たちは子供っぽく、かわいらしい幼児とい





●写真1 『An English Girl in Japan』
(p. 68) の上流階級の日本の婦人



●写真2 『A Lady's visit to Manila and Japan』(表紙)
の「茶屋」の日本の少女

った様子であり、楽しみやさやかな喜びを味わいながら生涯若い純真さを保っている」と捉えていた(ベネット 1904: 66)。すべての日本人女性を「little」と称することで、ベネットは自らも若年であるにもかかわらず西洋人であるがゆえに、年齢や階級を問わずすべての日本人女性よりも文明的な序列において高い位置にいるという考えを示しているのである。均質的で下位にいる日本人女性のイメージは、西洋人女性が西洋以外の女性を捉えるときの一般的な視点と一致している。

しかし本質化と幼児化という類似した傾向がある一方で、日本人女性の全般的な捉え方は第三世界の女性によく使われる表現とは異なっている。具体的にいうと、抑

圧された哀れな状態にいる日本人女性の記述はほとんど見かけず、西洋人女性が救出すべき対象として書かれていない。家事労働を強制される韓国女性の実態を非難する記述や、奥にある婦人部屋に閉じ込められているかのようなインド人女性とは異なり、日本人女性は全般に生活に満足しているように描写されている。唯一ベネットとD'Aは日本人女性を「poor (かわいそうな)」と表現しているが(ベネット 1904: 82; D'A 1863: 205)、どちらの場合も全体としては悲惨な状況ではないことを認識している。ベネットは、日本人女性は独立心がなく男性に従っているが、自尊心から自分たちの苦しい様子を外にあえて見せようとしないと書いている。しかし同時に、日本人女性は引きこもっているわけではなく、教養があり他国の既婚女性よりも高い倫理観をもっているとも記している。ベネットは日本人女性の状況について以下のように結んでいる。「われわれ欧州人は、極東の縁者である小さな女性たちを色々な面で模範とし、また多くを学ぶことができるかもしれない」(ベネット 1904: 82)。さらにD'Aは、「私が見聞きした他の東洋の国と違って、日本人はより一般的な意味で自分の妻を伴侶とし、一夫多妻制は法律で禁じられている」と加えている。しかしD'Aは娘を茶屋に売ることが法律で許されており、「そうした気の毒な娘たちは身持ちの悪い生活を送ることを余儀なくされる」とも指摘している。しかし予想される境遇とは異なり、こうした娘たちは25歳で自由の身となり、有利な結婚をすることもよくあったとも認めている(D'A 1863: 204-205)。さらに茶屋の娘たちの記述でよく描かれるのが陽気な笑い声である。例えばレイは娘たちに出くわすたびに、「突然笑いの輪が広がった」「くすくす笑い、はしゃいだ」「とめどなく笑った」様子を書いている(レイ 1990: 155, 158)。レイは娘たちの笑いとうしろな生活の関連性を指摘しているものの、笑いから生まれるイメージは、自由を必死に求める哀れな第三世界の女性像とはかけ離れている。

日本人女性の記述は西洋人女性による紀行文の一般的な傾向とは異なっている面がある一方で、日本という文脈に限ってみると、西洋人女性は日本人女性の実態を何の制約もなく見ていたわけではなかった。むしろ日本について書く著者が自らレンズのような固定観念を作り出し、それを通して日本人女性を見つめ理解し、描写していたといえる。英国女性による観察描写に特徴的な紋切り型のイメージと表現については、以下の二つの文章を比較するだけで十分に理解できる。両者とも、正装した「はる」という名の女兒の外見を書いた文章である。描写対象である「はる」は、ベネットの文章では8歳でバードの文章では12歳であり、日本滞在期間は重なっ



ていたとしても4年未満であるため同一人物とは考えにくい。またバードは「はる」の母を「ゆき」としているが、ベネットは「はる」の母を「伯爵夫人」と呼んでいる。

「はるの髪は前髪を上げ全体を後ろに引いて、二つの輪に結ってあった。その輪には真っ赤なちりめんが巻き付けられている。顔と喉にはおしろいをたっぷり塗り、白塗りは首の後ろの襟足まで続いていた。うなじの短いうぶ毛はすべて毛抜きで丁寧に抜かれている。唇にはうっすらと紅がさされ、顔は安っぽい人形のように見えた。着ている花柄の絹の青い着物は袖が地面に届くほど長く、青い帯に赤い帯締めをして、白塗りの首と着物の間に赤いちりめんの半襟がのぞいていた。小さな足にはいた木綿の白足袋は親指とその他の指が分かれており、きれいな漆塗りの下駄の深紅の鼻緒に引っ掛けられるようになっている。石段に立って客を迎える時も足に下駄を履いていた」(バード 1885: 68)

「おはるさんは素敵な灰色の絹のちりめんの着物をきて、襟元には赤いちりめんの半襟をつけ、金襴の帯を締めていた。顔と喉にはおしろいをたっぷり塗り、白塗りは首の後ろの襟足まで続いていた。唇にはほんの少し金色を帯びた紅を塗っていた。髪は前髪を上げ全体を後ろに引いて、二つの輪に結ってあった。その輪には真っ赤なちりめんが巻き付けられていた。足には「足袋」という、脇に留め金がつき親指だけ分かれた麻の白い靴下を履き、扉のすぐそばには漆塗りの小さな下駄がきちんと並べられていた」(ベネット 1904: 90)

二人の作者による二人の別の女性の描写が驚くほど似通っていることから、あらかじめ持っていたイメージやそれを描くための表現の同じ枠組みからすべての日本人女性を見る方法を、英国人女性たちが身に付けていたのは明らかである。

英国女性による著作に頻繁に登場する日本人女性の二つのイメージは、人形のような女性と優雅な女性である。前者はその容貌に関連したイメージであるが、後者は動作に起因している。英国人女性日本人の美的基準を人工的なものとして捉えていた。バードは日本人女性の髪の整え方について、結髪のふちのすべてのうぶ毛を抜いてしまうと髪がまるでかつらのように見えると述べ、また顔が仮面になるまでおしろいを塗るとも書いている(バード 1885: 201)。ベネットも同じような見解で、白塗りが「首でくっきりとした線で終わっていて、そこが人工と自然の分かれ目であるかのように見える」と書いている(ベネット 1904: 68)。このよう



●写真3 イザベラ・バード

に英国人女性は日本人の美の慣習を人工的だと捉え、化粧による人工的な見かけそのものが、盛装した一人の日本人女性から人工的な人物を生み出しているように感じていた。特別に着飾った日本人女性は人形のようなだと例えられることが多かった。上記の「はる」の描写に続き、バードは「はる」とその友達を人形のようなと書き(バード 1885: 68)、ベネットは「装いの全体の印象から優雅なろう人形を思い起こした」と書いている(ベネット 1904: 90)。バードはまた、婚礼の支度をした花嫁を「まるで生氣のない木彫り人形が正装したようだった」(バード 1885: 202)と描写している。後者については花嫁／人形が正装した優雅な雰囲気をバードは褒めているが、大抵の場合人形のようなという表現を作者は否定的な意味で使っている。バードは「はる」を「安っぽい人形」、友達を「仕上がりのよくない人形」(バード 1885: 68)と表現し、レイは「日本の美女は高い下駄を履いてふらふらと歩き、着物は体にぴったりとつき、身を突き出した姿勢は最近フランスで流行している『ギリシア風の前かがみ』を少し大げさにした風刺画のようだ」と書いている(レイ 1990: 159)。特に印象的なのは、英国人女性が非難するほど堅く正しい日本の正式な装いのせいで、人形のようなイメージの日本人女性が、動きが少なくぎこちない物体に一変している点である。ベネットは「この小さい繊細な存在が何らかの精神的、肉体的な能力を発揮するとは想像しがたかった」(ベネット 1904: 90)と述べている。

英国人女性は日本人女性の人形のようなイメージを否定的に捉えていた可能性がある。なぜなら人形のイメー



ジは、もう一つのより積極的で動きのある日本人女性のイメージ—動作の優雅さと魅力的な礼儀正しさ—とは相反するからである。バードは「ゆき」という名の女性を「これほど素敵で優雅な日本人女性には他に一度しか会ったことがない」と書き、「浮遊する妖精のように家の中を動き回っている」と畏怖の念をもって評している（バード 1885：53）。こうした動作の優雅さは、英国人女性が日本人女性について賞賛する洗練と礼儀正しさに直結していた。ベネットは、日本人女性は常に他者を「ゆつたりとした身のこなしと丁重さ」で迎え入れ、「その作法は紛れもなく魅力的である」と力説している（ベネット 1904：66、71）。それだけでなく、ベネットは「世界のどんな場所においても、美しい日本人の妻や娘にみられるような理想的な『淑女』を見つけることはできないだろう」とまで記している（ベネット 1904：67）。優雅で洗練された日本人女性のこのイメージは残念ながら全く欠点がない賞賛ではない。なぜなら日本人女性を妖精に例えるなど、東洋を魔法・空想・神秘の場所として捉える固定観念を思い起こさせる大げさな表現も時には使われたからである。

英国人女性は日本人女性を描写する際に自分より下位にいる均質的な他者として捉える表現を使う傾向があったものの、それでもその記述は他のアジアの国に住む女

性に当てはめられた固定観念とは異なる独自のイメージを表現していた。まず一つには、英国人女性は日本人女性を救済すべき犠牲者として西洋の読者に提示することはなかった。また日本人女性の「話しぶり、身のこなし、動きは上品で魅力的である」（バード 1885：69）と書くなど、英国人女性はその動きを賞賛していた。つまり彼女たちは日本人女性を人形として捉えるイメージを人工的であると考えて批判的に見ていた。このイメージは女性を動きのない物体に変えてしまい、そこからは英国人女性が大いに感嘆した優雅な礼儀正しさは生まれてこないからだ。

参考文献

- BENNETT, Ella M. Hart. *An English Girl in Japan*. London: Wells Gardner, Darton & Co., 1904.
- BIRD, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan*. (『日本奥地紀行』) London: John Murray, 1885.
- D'A, Anna. *A Lady's Visit to Manila and Japan*. London: Hurst and Blackett, 1863.
- RAE, Alice M. "A Journal Round the World, 1881-1882." *Yokohama Archives of History Review* 8. (伊藤久子「レイ夫人の世界周遊日記」『横浜開港資料館紀要』8) Yokohama: 1990, pp. 154-164.
- GANDHI, Leela. *Postcolonial Theory: A Critical Introduction*. New York: Columbia University Press, 1998.

Homogenized, Criticized, Idealized: Descriptions of Japanese Women in the Travel Writings of 19th Century British Women

The University of British Columbia Kyrie Vermette

Wherever they travelled around the world in the late 19th century, Western women wrote about the countries they visited and the sites they saw. These findings were often published as books which became part of the widely read corpus of Victorian travel literature. Such books, especially those written by women, invariably include a chapter or a page in which the author describes the appearance, customs, and situation of women in that country. However, since it was the late 19th century, women were seen, understood, and described within the framework of ideologies which held the West up as the source of civilization and modernity, and therefore superior to the Rest. Women travelers, in order to preserve their sense of superiority, often wrote from the perspective of observers who could see and describe, without becoming

personally invested or culturally influenced. Furthermore, women writers continually otherized the women that they wrote about by essentializing all women of a certain country into a homogenized and patronized trope. This trope has been named The Third World Woman by some scholars (Gandhi 1998). In this regard, British women travelers treated Japanese women no differently.

In the book, *A Lady's Visit to Manila and Japan*, published in 1863, there is a page entitled "Japanese Women" on which Anna D'A begins a description of all Japanese women by writing "The Japanese women are..." (D'A 1863, 202), as though all Japanese women were of the same mold and could be described all at once. Ella M. Hart Bennett, in her book *An English Girl in Japan*, published in 1904, devotes a whole chapter to "Japanese La-



dies" in which she aims to elucidate "their habits and ways" (Bennett 1904, 66). Furthermore, in both cases, the authors use the article 'the' when discussing Japanese women in the plural. "The Japanese women" (D'A 1863, 202; Rae 1990, 159), "the fair sex in Japan" (Bennett 1904, 66), "the little Japanese ladies" (Bennett 1904, 52) are all terms used to create a single homogenized category which can be described and then applied equally to all Japanese women, regardless of any actual variations. Furthermore, this category was firmly situated by the authors as inferior to Western women. The most striking example is in Bennett's word choice. Bennett invariably attached the word "little" between the homogenizing article 'the' and the racial description of 'Japanese.' Japanese women are referred to as "the little ladies" (Bennett 1904, 71) or "the little Japanese ladies" (Bennett 1904, 52) whenever they are mentioned. The word 'little' can have two meanings. The literal meaning refers to the physical size, and it may be that Bennett's use of the word is a nod to her description of Japanese women as being smaller and slighter than Europeans (Bennett 1904, 68). "Little" can, however, also be used to refer to someone of a young age. Although the age of the "little ladies" of whom she speaks is not always clear, the fact that she also refers to both the Meiji Empress and the Empress's elderly poetess as "little" indicates that real age was not a consideration (Bennett 1904, 61, 114). Rather, this use of 'little' as it designates age is derived from Bennett's view that Japanese women, "in their general ideas and knowledge of the world they are like children – delightful children too – and in their love of enjoyment and simple pleasures they retain their youthful simplicity all their lives" (Bennett 1904, 66). By referring to all Japanese women as "little," Bennett is, therefore, displaying her belief that, despite her own youth, because she is from the West, she is in a hierarchal position of civilizational superiority to all Japanese women regardless of age or class. This image of Japanese women as homogenized and inferior, corresponds with the way Western women tended to view any woman who was not from the West.

Despite the similar trends of essentializing and infantilizing, however, the general perception of Japanese women differs from the common trope of The Third World Woman, in that Japanese women are rarely described as in a piteous state of oppression from which they must be rescued by Western women. Unlike writ-

ings on Korean women which deplore their forced domestic labour, or Indian women who are seen as imprisoned in the zenanas, Japanese women are generally depicted as content with their situation in life. Only Bennett and D'A call Japanese women "poor" (Bennett 1904, 82; D'A 1863, 205), and in both cases, they acknowledge that even those situations are not wholly negative. Bennett writes that Japanese women have no independence and are subjugated to men, but their pride will not allow them to show the world how they suffer. Yet, at the same time, Bennett notes that they are not kept in seclusion, are well-educated, and have a higher standard of morality than married women in any other country. She finishes her description of the situation of women by saying that, "we Europeans might well in many respects imitate, and have still much to learn from, our little cousins in the Far East" (Bennett 1904, 82). D'A adds that "the Japanese make companions of their wives in a more general sense than any Eastern nation I have seen or heard of, polygamy being, we were told, forbidden by law." However, she points out that the law also allows anyone to sell their daughter to a Tea House where "they are compelled to commence an immoral course of life, poor girls." Contrary to what would be expected though, these girls are acknowledged to be freed from the age of 25 and to frequently make advantageous marriages (D'A 1863, 204-205). Moreover, the general trend amongst authors for describing girls at Tea Houses is one of merriment. Each time Rae encounters these girls she writes how "they went into contagious fits of laughter," "giggled, romped," and "laughed immoderately" (Rae 1990, 155, 158). Although Rae does suggest an association between their laughter and their sexual immorality, the image created is far from the piteous Third World Woman who desperately begs for liberation.

While the descriptions of Japanese women differ in some aspects from the general trend in Western women's writings, within the context of Japan, women authors were by no means free to see Japanese women as they were in reality. Rather, authors writing about Japan created their own stereotypes as a lens through which Japanese women were seen, understood, and described. To comprehend the stock images and phrases that existed and coloured British women's observations, one need search no further than the following passages, both describing the appearance of a young girl named Haru who is decked out in formal attire. It is unlikely that the object



being described, Haru, is the same girl, since she is eight years old in Bennett's story and twelve years old in Bird's story, and the possible overlap of their time in Japan is no more than four years, and because Bird merely calls Haru's mother "Yuki," while Bennett refers to Haru's mother as "Countess."

"Haru's hair is drawn back, raised in front, and gathered in a double loop, in which some scarlet crepe is twisted. Her face and throat are much whitened, the paint terminating in three points at the back of the neck, from which all short hair has been carefully extracted with pincers. Her lips are slightly touched with red paint, and her face looks like that of a cheap doll. She wears a blue, flowered silk kimono, with sleeves touching the ground, a blue girdle lined with scarlet, and a fold of scarlet crepe lies between her painted neck and her kimono. On her little feet she wears white tabi, socks of cotton cloth, with a separate place for the great toe, so as to allow the scarlet-covered thongs of the finely lacquered clogs, which she puts on when she stands on the stone steps to receive her guests, to pass between it and the smaller toes" (Bird 1885, 68).

"O Haru San was dressed in a fascinating gray silk crape kimono, with a fold of scarlet crape round the neck and a gold brocaded obi. Her face and throat were much whitened, the paint terminating in three points at the back of the neck; her lips were reddened and slightly touched with gold. Her hair was drawn back, raised in front and gathered into a double loop, into which a band of scarlet crape was twisted. On her feet she wore 'tabi,' little white linen socks hooked up at the side, with a separate place for the great toe, and I noticed her little lacquered 'geta' (clogs) were placed neatly together just outside the door" (Bennett 1904, 90).

The remarkable similarity in these descriptions of two different women written by two different writers, clearly demonstrates how British women were taught to view all Japanese women through the same framework of preconceived images and phrases created to describe those images.

The two images of Japanese women which crop up most frequently in the writings of British women are the Japanese woman as a doll and the Japanese woman as graceful, the first of which pertains more to her appearance while the latter pertains to her actions. British women viewed Japanese beauty standards as artificial. In describing the way that Japanese women styled their

hair, Bird comments how the removal of all the small downy hairs around the edge of the hairdo created the illusion of a wig, and goes on to say that they put white powder on their skin until it looked like a mask (Bird 1885, 201). Bennett corroborates with this by saying that the white paint ended in "a hard line around the neck showing the point where art stops and Nature begins" (Bennett 1904, 68). British women thereby perceived of Japanese beauty practices as artificial, and felt that the artificial appearance of the cosmetics in turn created an artificial person out of a Japanese woman who was so adorned. Japanese women who were dressed in their finest were often described as resembling dolls. Following their descriptions of Haru, as quoted above, Bird describes her and her friends as dolls (Bird 1885, 68) and Bennett says that "the whole effect reminded me of an exquisite wax model" (Bennett 1904, 90). Bird also portrays a bride who has been decorated for the ceremony "as if a very unmeaning-looking wooden doll had been dressed up" (Bird 1885, 202). Although in the latter case Bird praises the exquisite good taste with which the bride/doll had been dressed, for the most part the description of being doll-like is considered a negative by the authors. Bird calls Haru "a cheap doll" and her friends "ill-executed dolls" (Bird 1885, 68), while Rae declares that, "a Japanese belle, tottering along on high wooden clogs, with her clothes clinging tightly to her form and her body thrown well forward, looks like a slightly exaggerated caricature of a recent French fashion 'Grecian bend' and all!" (Rae 1990, 159). What is striking is that the aspect of Japanese formal apparel which seems to illicit the disapprobation of British women is the way that the doll-like image transforms Japanese women into a static object whose mobility is limited or distorted. As Bennett says "it was impossible to imagine that tiny delicate being capable of any mental or physical exertion" (Bennett 1904, 90).

The doll-like image of Japanese women may have been viewed negatively by British women because it contradicted the other, more positive and action-based image of Japanese women, the gracefulness of their movement and their charmingly polite manners. Bird describes a Japanese woman named Yuki as "the sweetest and most graceful Japanese woman but one that I have ever seen" and says with awe that "she moves about the house like a floating fairy" (Bird 1885, 53). Such gracefulness of movement was tied directly with the refinement and po-



liteness that British women admired in Japanese women. Bennett declares that Japanese women always greet others with “easy grace and courtesy” and that “their manners are unquestioningly charming” (Bennett 1904, 66, 71). In fact, Bennett goes so far as to say that “nowhere, perhaps, in the world does one find a more ideal ‘lady’ than amongst the wives and daughters in fair Japonica” (Bennett 1904, 67). Unfortunately, this image of Japanese women as graceful and refined is not an untainted example of admiration since it was occasionally exaggerated to the extent that Japanese women were described as being like a fairy, an image which harkens to the stereotype of the East as a place of magic, fantasy, and mystery.

In their descriptions of Japanese women, British women often fell into the trope of viewing them as a homogenized Other in an inferior position, yet their writings followed a specific set of images which differed from the established stereotype applied to women living in other Asian countries. For one, British women did not present

Japanese women to their Western readership as victims in need of rescue. For another, in writing that a Japanese woman “speaks, acts, and moves with a charming gracefulness” (Bird 1885, 69), British women were admiring Japanese who were active. They, therefore, criticized the image of a Japanese woman as a doll because they viewed this image as an artificiality which rendered her a static object from which they did not expect to receive the graceful politeness which they so enjoyed.

Bibliography

- Bennett, Ella M. Hart. *An English Girl in Japan*. London: Wells Gardner, Darton & Co., 1904.
- Bird, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan*. London: John Murray, 1885.
- D'A., Anna. *A Lady's Visit to Manila and Japan*. London: Hurst and Blackett, 1863.
- Rea, Alice Mary. “A Journey Round the World, 1881–1882.” *Yokohama Archives of History Review* 8 (March 1990): 164–154.
- Gandhi, Leela. *Postcolonial Theory: A Critical Introduction*. New York: Columbia University Press, 1998.

